

戦後に語られた「道徳革命」：  
太宰治「斜陽」と太田静子「斜陽日記」を比較して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂上, 幸 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7012">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7012</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 戦後に語られた「道徳革命」

—— 太宰治「斜陽」と太田静子「斜陽日記」を比較して ——

坂 上 幸

### 一、問題の所在

太宰治「斜陽」は、一九四七年の『新潮』七月号から十月号に四回にわたって連載された。そのプレテクストにあたる太田静子「相模曾我日記」は、太宰死後のスキヤンダラスなコンテクストに乗じて、石狩書房が一九四八年十月に『斜陽日記』という書名で刊行した<sup>(1)</sup>。両者は母と娘が山荘に引越してから母が死ぬまでの生活が語られ、その物語内容の多くは共通している。酷似しているのは物語内容のレベルに留まらず、蛇の卵を焼いてしまった事件や火事事件、ローザルクセンブルクの『経済学入門』を受容する場面等では、物語言説のレベルにおいても一言一句一致する箇所がみられる。

その一方で、「斜陽日記」は母の死をもって完結するが、「斜陽」では母の死後にかず子が自らの「恋」を貫いて、「こひしいひとの子を生み、育てる事」を「道徳革命」として語る。この「道徳革命」について、饗庭孝男は「やっと母の死後に言葉の上で主張されるにすぎない<sup>(2)</sup>」と述べ、東郷克美も「『子を生む』というのは非常に唐突で、私生児を生むことが道徳革命に繋がっていくというのは、そのこと自体、十分納得していくようには必ずしも作品は形象されていない<sup>(3)</sup>」

と否定的な見解を示している。

では、「斜陽」の語り手かず子は「斜陽日記」と酷似した物語言説を語り、母の死後に「道徳革命」の主張を唐突に展開したに過ぎないのだろうか。

そうではない。テキスト外部で展開された太宰治と太田静子との関係性に立ち入らず、二つのテキストをフラットに置き並べたとき、かず子が「道徳革命」という言説を生成し得た一要因は、両者における物語内容が位置づけられた時代の相違にみとめられる。野原一夫は「斜陽」と『斜陽日記』で、次のように両者における転居の時期を比較している。

静子の回想文は、戦争中の昭和十八年十一月、叔父の世話で神奈川県足柄下郡下曾我村に疎開してから、敗戦後の二十年十二月に母と死別するまでの、母娘ふたりのあわれ深い日常の記録である。「斜陽」では二十年十二月にかず子と母が、伊豆長岡からバスで十五分ほどの山荘に移り住むことになっており、戦中と戦後との時代の違い、また山荘の場所も違っているのだが、

ここで、野原が両者の物語内容が位置づけられた時期を比較し、「戦中と戦後との時代の違い」を指摘していることは重要である。同一の転居という物語内容が「斜陽日記」では戦中の疎開を背景に語られ、「斜陽」では戦後における「貴族」の没落と意味づけられて語られているのである。この転居が位置づけられた時代の相違と同様に、かず子が語り得た「道徳革命」の言説も、「斜陽日記」とは異なる戦後の時代状況の中で生成された主張なのではないだろうか。

「斜陽」において、かず子が語る「道徳革命」を戦後の時代性と対照させる分析は既に成されている。高田知波は、いち早くかず子が語る時間を戦後の歴史的事実と対応させて、「日本国憲法が国会で成立した月に『お母さま』が死に、二・一ゼネスト中止の直後にかず子が最終書簡を起筆している」と指摘した。この指摘を継承した金ヨシロンは『小説と〈歴史的時間〉』で、かず子が語る一九四六年四月以前の時間が語られる「冬の花火」とも対照させて次のように述べている。

『冬の花火』から『斜陽』へ、その間の国民主権が成立していく過程を見出してはじめて、過去を引き受ける現在、

そこから未来を主導していこうとするかず子の革命の可能性が垣間見られる<sup>7)</sup>。

ここで、かず子が語る「国民主権が成立していく過程」が重視されていることは見逃せない。また、青木京子が「かず子の革命の本質は『女』の身辺生活における〈道德革命〉であり、敗戦後の憲法改正や家族制度の問題と深く関与している」<sup>8)</sup>ことを、「古い道德」としての「女大学」、「修身教科書」、「教育勅語」を参照しながら論じていることも示唆に富む。

本論では、「斜陽」と「斜陽日記」の物語内容が位置づけられた時代の相違を比較しながら、かず子が語る「道德革命」へと至る道行きをたどる。「斜陽日記」との比較を通して、「道德革命」は母の死後に唐突に語られたものではなく、女性参政権が行使され、国民主権が明記された新憲法が成立していく時代状況のただ中で、かず子が主体的な女性の生き方を模索し続けたことで生成された主張であることを明らかにしたい。

## 二、静子とかず子における語り方の相違

「斜陽日記」の語り手静子と「斜陽」の語り手かず子は、それぞれ語る地点を何処に定め、如何にして語っているのだろうか。共通して語られている物語内容が位置づけられた時間を比較する前に両者の語り方の特徴を押さえておきたい。

「斜陽日記」における物語内容が位置づけられた時間と、それを静子が語る地点について、小森陽一は小学館文庫版『斜陽日記』の解説で次のように述べている。

空襲に脅かされる太平洋戦争の末期から、敗戦を経て、母の「呼吸の絶える日」までの記録。(中略)『斜陽日記』は、母の死後、しばらくたってから、この二年数ヶ月の生活を、全体として回顧する意識によって統括されている。<sup>9)</sup>

この指摘に即して「斜陽日記」の本文を確認すると、一九四三年春から一九四五年十二月六日までに生じた物語内容が語られている。父の七回忌にあたる一九四三年五月二日に五年前の離婚を回想している等、所々で時間の順序が前後する箇

所もみられるが、ほとんどの物語内容は戦中から終戦直後までの時間経過に沿って語られている。

一九四五年元日の記述は「お母さま」の日記を引用しているが、それ以外は全て静子が事後的に回想している。戦局の変化や戦時下の空襲などは、日記のように具体的な日付を伴って克明に語られているのだが、その日にあった出来事をその日に語っているのではない。小森も「母の死後、しばらくたってから、この二年数ヶ月の生活を、全体として回顧する意識によって統括されている」と指摘しているように、一九四五年十二月六日に母が死んだ後に、「二年数ヶ月の生活」全体を時系列に沿って回想して語っているのである。

対して、「斜陽」の語り手かず子が語る地点について、高田知波は『出来事』の時間とかず子の《語り》の時間とが、単純な進行形でもなければ単純な回想でもないダイアレクティックな関係を形成している<sup>10</sup>と指摘している。「斜陽」の本文を確認すると、かず子が語る地点は、一九四六年四月から一九四七年二月七日の少し後までの期間の中で章ごとに行っていく。このそれぞれの地点に立脚して、かず子は戦中のヨイトマケ体験を回想したり、直治が六年前に書いた「夕顔日誌」を引用し、そのコンテクストに触発されて、上原から受けたキスや、それと同時期にかず子が経験した離婚を回想したりしながら自身の主張を発展させていく。

以上、「斜陽日記」と「斜陽」それぞれの語り方を指摘した。「斜陽日記」の語り手静子は語られる出来事全てが完結した後の地点から回想し、結末となる母の死に向かって語っている。一方の「斜陽」では、かず子が語る行為とそこから生成される言説が連動しながら進行していく。したがって、第一章を語る一九四六年四月時点のかず子は、一九四六年十月に母が死に、その後自身「道徳革命」を語ることになることをまだ知らない。榊原理智が「ある出来事を語る語りそのものが、その次の瞬間には対象化され出来事として記述され、その記述が次の語りを誘発していく<sup>11</sup>」と指摘しているように、かず子が最終的に語る「道徳革命」は、語り始めた当初からかず子の構想としてあったものではなく、語る行為が何度繰り返され徐々に蓄積された言説の中から立ち現れてきたものなのである。したがって、「斜陽日記」では語られ

ていない「道徳革命」が何処から芽生えて発展した主張であるのかを明らかにするために、かず子が語る言説の順序に即して「斜陽日記」との差異を検討する必要がある。

### 三、蛇事件を語ることで目覚めたかず子の自我

「表1」は、「斜陽」と「斜陽日記」双方で共通して語られている主要な物語内容を八つ取りあげ、それぞれ物語内容が位置づけられた時間と語る地点を比較したものである。本節以降では、この中から「道徳革命」への道行きを考えるにあたって重要な蛇事件、「女大学」に対する態度、「経済学入門」の解釈、天皇の写真を見せる場面、母の死について、位置づけられた時代状況の相違を比較しながら順にたどりたい。

まずは、「斜陽」の第一章で語られる蛇の卵を焼いた事件の位置づけについて、「斜陽日記」と比較しながら検討する。

「斜陽日記」において、蛇の卵を焼いた事件は一九四四年の「十一月も半ば過ぎた或る日」に起きた出来事として小説の半ばで回想されている。子供たちが蝮の卵だと言い張るため、静子は焼いてみたがなかなか燃えない。蝮ではなく蛇の卵であったとわかり、その卵を埋めて埋葬した。このことを母に見られた静子は、父が亡くなったときに蛇を目撃して母がそれ以来蛇に対して「畏怖の情」を抱くようになったことを思い出し、母に不吉な思いをさせてしまったと恐れる。それから何度か卵の母親と思われる蛇を目撃した。

母の死後に回想して語られていること、母の死に際で再び「蛇」が登場することを考慮すれば、父の死と結びつく「蛇」というモチーフは、その後に母の死を語るための伏線と考えられる。母の死因は結核であったはずだが、ここでは「自分の胸の底に、お母さまのお命をちぢめる気味悪い蛇が一匹はいり込んでいますようで」、あるいは「私の胸の中にすむ蝮みたいにごろごろした醜い蛇が、この悲しみが深く、うつくしいうつくしい母蛇を、いつか、いつか食い殺してしまうの

ではなかるうか」と、静子が蛇の卵を焼いたことによって母の「畏怖の情」を呼び起こしてしまい、それが母の死の要因になるかもしれないと感じたと回想している。

この一連のエピソードは、一九四六年四月の地点でかず子が語る「斜陽」の第一章において、「その四、五日前の午後」の出来事として語られている。その物語言説は、「斜陽日記」の物語言説とほぼ同一である。つまり、静子が戦中の出来事として語った蛇事件を、かず子は一九四六年四月の出来事として語っている。加えて、かず子はこの蛇事件を第一章冒頭の朝食の場面の直後に配置していることから、かず子は手記を語り始めるにあたって、蛇事件を重要な出来事と意義づけて語っていると考えられる。では、蛇事件は一九四六年四月に設定された「斜陽」のコンテクストに位置づけられたことで如何なる役割を担うことになったのだろうか。

第一に着目したいのは、蛇事件が語られる直前で形成されている戦後における戦中との連続性である。一九四六年四月の「けさ」に、戦後の時代性を象徴する「アメリカから配給になつた罐詰のグリーンピース」で作つたスープを飲んだ「お母さま」は、南方に出征して「終戦になつても行先が不明」になつているかず子の弟、直治を思つて「あ」と声をもらす。配給された「グリーンピース」によって物質的な戦後性が語られる一方で、銃後で直治の安否を気遣う母娘の戦争は直治が帰還するまで終わらない。終戦から八ヶ月が経過しているためか直治の死を「覚悟」している「お母さま」に、かず子は直治は「悪漢」だから死なないと語る。

このように、戦中の出来事として静子が語った蛇事件を、かず子は戦後になつても弟の安否を案ずる母娘の戦中から連続する意識の中で語っている。<sup>12</sup> この意識に触発されて、かず子は数日前に蛇の卵を焼いた事件を回想し、そこからさらに、母が蛇に対する「畏怖の情」を抱く要因となつた十年前の父の死を回想しているのである。

だが、「斜陽日記」のように、この一連の死にまつわるイメージをその後語る母の死と結びつく伏線ととらえることはできない。第一章を語る一九四六年四月地点のかず子は、その後母が結核で亡くなることをまだ知らないはずだ

からだ。「自分の胸の奥に、お母さまのお命をちぢめる気味わるい小蛇が一匹はひり込んでゐるやうで」、あるいは「私の胸の中に住む蝮みたいにごろごろして醜い蛇が、この悲しみが深くて美しい美しい母蛇を、いつか、食ひ殺してしまふのではなからうか」という箇所は、「斜陽日記」では当時に感じた自らの過ちによって母が死ぬ予感として語られていたが、「斜陽」の第一章において強調されているのは、かず子の「胸の中」で母を「食ひ殺」さんばかりにのたうつ強い自我である。

それは第一章の末尾で次のように語られていることから明らかである。

ああ、何も一つも包みかくさず、はつきり書きたい。(中略) お母さまは、幸福をお装ひになりながらも、日に日に衰へ、さうして私の胸には蝮が宿り、お母さまを犠牲にしてまで太り、自分でおさへてもおさへても太り、(中略) 私にはこの頃、こんな生活が、とてもたまらなくなる事があるのだ。蛇の卵を焼くなどといふはしたない事をしたのも、そのやうな私のいらいらした思ひのあらはれの一つだったのに違ひないのだ。さうしてただ、お母さまの悲しみを深くさせ、衰弱させるばかりなのだ。

恋、と書いたら、あと、書けなくなつた。

ここでも、蛇事件の言説と同様に、かず子は「私の胸には蝮が宿り、お母さまを犠牲にしてまで太り、自分でおさへてもおさへても太り」と、母を「犠牲」にしても抑えきれない自我を語る。そして、かず子は蛇の卵を焼いた行為を既存の「生活が、とてもたまらなくな」ってしまふやうな「私のいらいらした思ひのあらはれの一つ」だったと自ら意味づける。こうして、蛇事件を語ることで自我に目覚めたかず子は、「何も一つも包みかくさず、はつきり書きたい」と自己の内面を表現したい欲求かられて、「恋、」と語り始めようとする。

では、なぜ第一章が語られる一九四六年四月の地点において、かず子は自己の内面を表現したいと感じるようになったのだろうか。そこには前述した戦中との連続性とは対照的な戦後民主主義に基づく動向が関係していると考えられる。



テキスト外部の一九四六年四月十日に行なわれた第二十二回衆議院議員総選挙は初の男女普通選挙であり、初の女性議員として三十九名が当選した<sup>13</sup>。永吉寿子も「女性の発言権が社会的に承認された当時の社会状況を考えると、かず子の手記の起点とは、女性の声表象象可能となるポイントに重なっていた」と指摘しているように、女性が自己の意見を主張し政治に参加できるようになった気運に支えられて、かず子は自我に目覚め、自己の内面を表現したいと思うようになったのではないだろうか。

#### 四、「女大学」に準ずる静子と反抗するかず子

一九四六年四月に蛇の卵を焼いた事件を「私のいらいらした思ひのあらはれの一つ」と意味づけ、「恋」と語り始めようとしたかず子は、その後どのようにして自己の内面を主張していくのだろうか。その自我を具体的に言語化して主張するようになるのは、一九四六年夏に投函された三通の上原宛書簡においてである。第四章に引用されたこの書簡に対する返事は一通も得られていないため、かず子は一方的に三通の書簡を執筆して投函していることになる。第一書簡の趣旨は、「いまの生活からのがれ出」て、妻子のある上原の「愛人として暮らすつもり」だというものである。この主張は如何にして形成されたもののだろうか。第二章と第三章で語られる言説の流れを確認すると、書簡の趣旨は、女性の生き方に関する主張であることが読み取れる。

第二章で、一九四六年初夏に「戦争の唯一の記念品」としての地下足袋を履いて畑仕事をしているかず子は、母から叔父の言いつけを聞かされる。言いつけの内容は、麻薬中毒の直治が帰還する予定であることと、預金の封鎖と財産税の徴収で打撃を受けたことに伴って、母子三人の生活費を工面するために嫁入りするか奉公するかしなければならぬというものであった。時代状況の変化によって二者択一を迫られたかず子は、戦中のヨイトマケ体験<sup>15</sup>を糧として、「私には、行

くところがあるの」と要請された選択肢とは異なる第三の道を主張する。この主張は、第一章末尾で語っていた既存の「生活が、とてもたまらなくなる」という思いを母に対して表明したものである。自身の主張を言い放ったかず子は、「だんだん、或るひとが恋ひしくて、恋ひしくて、お顔を見て、お声を聞きたくてたまらなくな」っていく。そして、かず子は母に「他の生き物には絶対に無くて、人間にだけあるもの」は「ひめぐと」だと語る。

ここまでの過程において留意すべきは、「恋」についての言説よりも、嫁入りか奉公かという既成の女性の生き方とは異なる第三の道の可能性が先に主張されていることである。だが、この時点では第三の道の行き先も「恋ひし」い「或るひと」が誰なのかも語られていない。自身の思いを「ひめぐと」と認識したに留まっている。

つづく第三章は、直治が帰還した十日ほど後に語られている。かず子は直治が出征前の麻葉中毒に苦しんでいた頃に綴った「夕顔日誌」を読み、六年前に直治の麻葉中毒が引き起こした借金問題を契機に上原と出会い、キスを受けたことを思い出す。一九四六年の地点において自我に目覚めたかず子は、その当時には自覚できなかった「ひめぐと」の内実として、太平洋戦争前の一九四〇年に上原から受けたキスを回想している。

このように、第二章で戦中体験を糧にして要請された女性の生き方に反発し、第三章で六年前に上原から受けたキスを「ひめぐと」の内実として提示したことに導かれて、第四章の第一書簡の「いまの生活からのがれ出」て、妻子のある上原の「愛人として暮らすつもり」という主張は生成されている。つまり、上原の「愛人」になりたいという主張は、要請された生き方に反抗して自らの「恋」を貫く道として展開されている。

だが、この女性の生き方に関する主張は容易に受け入れられるものではないとかず子は想定している。第一書簡の冒頭は次のように語り始められていた。

私のこの相談は、これまでの「女大学」の立場から見ると、非常にずるくて、けがらはしくて、悪質の犯罪でさへあるかも知れませんが、(中略) 私はただ、私自身の生命が、こんな日常生活の中で、芭蕉の葉が散らないで腐つて

行くやうに、立ちつくしたままおのづから腐つて行くのをありありと予感せられるのが、おそろしいのです。とても、たまらないのです。だから私は、「女大学」にそむいても、いまの生活からのがれ出たいのです。

ここで、かず子は自身の「生命」が「おのづから腐つて行」かないように自身の意志を貫くことは、「女大学」にそむく「悪質の犯罪」だと語っている。女性が自らの意志に基づいて生き方を選択することを許容しない「これまでの『女大学』の立場」とは如何なるもののだろうか。

石川松太郎は「女大学について」と題する解説で、「女大学」は「十八世紀の初頭、近世中葉に『貝原益軒の著作』として成立し」た「女子教訓書」であると説明している。<sup>16</sup> その「女大学」の本文を参照すると、「惣じて婦人の道は、人に従ふにあり。(中略)これ女子第一の勤めなり<sup>17</sup>」と、女は家のために尽くすものと定められている。このように女性の自我を抑圧する「女大学」の制度が普及していた時期について、石川は同書で次のように説明している。

これからほぼ二世紀ものあいだ、明治維新という深甚な社会改革さえとびこえて、本書は読みつぎ学びつがれてきた。このことは、国家権力の家父長的な家族制度の存続・補強をはかる、いわゆる良妻賢母主義の教育政策と、それにもかかわらず、あるいは、そのゆえに、社会の近代化と矛盾して動揺する現実の家族関係・家庭生活と、深いかかわりあいにあつたのは、いうまでもない。「女大学」が、真に「歴史的産物」となるのは、第二次世界大戦の終了後まで、またなければならなかったのである。<sup>18</sup>

ここで石川は、江戸時代の封建主義に基づいて成立した「女大学」は、明治維新以後の「国家権力の家父長的な家族制度の存続・補強」を背景に温存され、「社会の近代化と矛盾して動揺する現実の家族関係・家庭生活」との間で摩擦を起こしながら、戦後まで存続していたことを指摘している。<sup>19</sup>

たしかに、家父長制に基づく「女大学」が権力を保持していた戦中に、「斜陽日記」の語り手静子は過去の離婚を悔い改めて「女大学」を再受容している。一九四四年の五年前、すなわち一九三九年に父が夢枕に立ったとき、静子は離婚を

決意していた。その翌朝の心境を次のように回想している。

「ひとたび嫁ぎてかへらざるは定れる理なり。」この女大学の言葉は、封建的というより、もつと深い、内面的な女の生理にきざしを持つ言葉である。「父の家に在りては父に従い、夫の家にゆきては夫に従い。」御父上は、この言葉を、静子がまだ、小さい時に教えて下さった。御父上は、夫と別れようとしている娘に、再びこの言葉を教えに来て下さったのだ。でも、もう、どうしても救いようのない、静子を見出して、あきらめて、お帰りになつてしまった。

「幼より身を終るまで、わがま、に事を行ふべからず。」私は、女大学の訓を、そらんじていた。それなのに静子は夫の家を出なければならぬ。「凡女子を愛し過して、恣に育てぬれば。」

朝の冷たい寝間に一人、うつけたように坐っていた。

ここで示されているのは、幼い頃に父から教わった「女大学」の言葉と、それにそむく離婚への意思とのせめぎ合いである。注目したいのは、父から教わった女性の自我を抑圧する制度を、静子自身が「内面的な女の生理にきざしを持つ言葉」と意義づけていることである。「女大学」を倫理の規範として自ら定めた静子は、その規範にそむく離婚を罪として五年間抱えていたはずである。一九四四年の父の命日の夜、五年ぶりに夢の中で「過去のことは、悔いさえすればいいのですね」と父に語りかけ、家父長制を支配する存在としての「父」から許される。そして、命日の翌日に静子は「女大学」を再読し、「いましめとして大切に持っていた本」として再受容している。

このように、戦中に静子が戒めとして受容していた「女大学」に、一九四六年夏に書簡を執筆するかず子は服従しない。振り返れば、第三章でかず子は、静子と同様に六年前の離婚を回想している。だが、女性が国会で意志を主張できるようになり、戦後民主主義へと向かう一九四六年夏に立脚するかず子は、過去の離婚を悔い改めることなく、さらに「女大学」に反抗して自身の「恋」を貫く姿勢を表明している。この自身の「恋」を貫く主張は、第二書簡、第三書簡へと書き進められる中で、さらに上原の子を産みたいという主張に発展していく。

## 五、『経済学入門』の解釈と国民主権

「斜陽」の第五章で、かず子は母が一九四六年九月に結核と診断されて同年十月に亡くなるまでを母の死後の地点から回想している。かず子の「道徳革命」の道行きを考えるにあたって重要な物語内容は、母が結核と診断された後の出来事として語られている『経済学入門』の受容と、母が亡くなる日の午前中の出来事として語られている天皇についての会話である。『経済学入門』の感想を語っている場面から検討する。

「表1」に示したように、ローザルクセンブルクの『経済学入門』受容について、静子は一九四五年九月の出来事として語り、かず子は一九四六年九月の出来事として語っている。静子は、読後の感想を「経済学として読むと単純で、わかり切ったことばかり」だとしながらも、「古い思想を、片端から、何の躊躇もなく破壊して行く、がむしろな勇氣」、すなわちローザの「破壊思想」を説く姿勢に驚嘆している。一方のかず子は、静子と同様にローザの姿勢を看取しながら次のように語っている。

どのやうに道徳に反しても、恋するひとのところへ涼しくさつさと走り寄る人妻の姿さへ思ひ浮ぶ。(傍線…坂上、以下同様)破壊思想。破壊は、哀れで悲しくて、さうして美しいものだ。破壊して、建て直して、完成しようといふ夢。さうして、いつたん破壊すれば、永遠に完成の日が来ないかも知れぬのに、それでも、したふ恋ゆゑに、破壊しなければならぬのだ。革命を起さなければならぬのだ。ローザはマルキシズムに、悲しくひたむきの恋をしてゐる。

この傍線部はかず子のみが語っている箇所である。かず子の語る「道徳に反しても、恋するひとのところへ涼しくさつさと走り寄る人妻の姿」は、第四章で「女大学」にそむいても上原の愛人になりたいと語っていたかず子自身と重なる。つまり、かず子はローザの「破壊思想」を説く姿勢を自身の「女大学」に反抗して「恋」を貫く姿勢と重ね合わせて解釈し

ている。

そして、十二年前すなわち一九三四年に「斜陽日記」と同一の「レニンの本」を読まなかった出来事を回想した後、かず子は次のように語っている。

いままで世間のおとなたちは、この革命と恋の二つを、最も愚かしく、いまはしいものとして私たちに教へ、戦争の前も、戦争中も、私たちはそのとほりに思ひ込んでゐたのだが、敗戦後、私たちは世間のおとなを信頼しなくなつて、何でもあの一とたちの言ふ事の反対のはうに本当の生きる道があるやうな気がして来て、革命も恋も、実はこの世で最もよくて、おいしい事だ、あまりいい事だから、おとなのひとたちは意地わるく私たちに青い葡萄だと嘘ついて教へてゐたのに違ひないと思ふやうになつたのだ。私は確信したい。人間は恋と革命のために生れて来たのだ。

ここでも傍線部は、終戦から一年が経過した地点に立脚するかず子のみが語っている箇所を示している。「恋」と「革命」は、共に戦前・戦中においては「最も愚かしく、いまはしいもの」と「思ひ込んでゐた」が、「敗戦後」に「実はこの世で最もよくて、おいしい事」ではないかと疑ひだした概念であると語っている。前述したように、女性の恋愛は江戸時代から戦後に至るまで存続した家父長制の支配下で抑圧されていた。同様に、マルクス主義に基づく革命も一九二五年に制定され一九四五年十月にGHQによって廃止された、国体の変革または私有財産制度の否認を目的とした政治活動を取り締まる治安維持法のもとで弾圧されていた。「恋」と「革命」の共通点は、戦前・戦中には弾圧されていたが戦後にその支配制度が崩壊した点にある。

このように、一九四六年の四月から九月にかけて自らの「恋」を貫く道を模索し、『経済学入門』の「破壊思想」に基づく「革命」との共通点を見いだしたかず子は、両者を「本当の生きる道」を示すものとして結びつける<sup>20</sup>。そして、静子が「人間は恋と革命のために生れて来たのであるのに」と語るのに対して、かず子は「人間は恋と革命のために生れて来たのだ」と断定する表現を用いて、ローザの「がむしやらな勇氣」に触発されて、自らの「恋」を貫く姿勢を表明してい

る。

そして、「恋と革命」の結びつきを発見した直後の一九四六年十月に、母の死が目前に迫っていることを知ったかず子と直治は、次のように母が亡くなった後の生き方について会話を交わしている。

〔前略〕 姉さんこそ、これから、叔父さんによろしくおすがり申し上げるさ」

「私には、……」

涙が出た。

「私には、行くところがあるの。」

「縁談？ きまつてるの？」

「いいえ。」

「自活か？ はたらく婦人。よせ、よせ。」

「自活でもないの。私ね、革命家になるの。」

ここで、直治が「女大学」の規範に則って、「姉さんこそ、これから、叔父さんによろしくおすがり申し上げる」と発言したのに対して、かず子は「私には、行くところがあるの」と応じる。このかず子の科白は、第二章で叔父から嫁入りか奉公かの二択を迫られた際に第三の道として提示したものである。直治も叔父と同様に女性が生きる道は縁談を決めるか自活するかかの二択しか想定していない。だが、かず子は第二章で明言しなかった「行くところ」の内実を、ここでは「革命家になる」と明言している。

このように、自らの「恋」を貫く姿勢を上原宛書簡に書き綴り、『経済学入門』を読んで「恋」と「革命」の共通点を見いだした一九四六年十月地点のかず子は、第二章を語る一九四六年初夏の地点では思いつきもなかった「革命家になる」道を直治に宣言することができた。母の死の直前に「革命家」宣言をしたかず子の中では、既に第六章以降で自らの

「恋の成就」に向けてひた走る準備は整っている。

それでは、「革命家」として主体的に生きることを明言したかず子にとって、日本国憲法が国会で成立した一九四六年十月の同日に位置づけられた天皇の写真を母に見せた場面と母の死は如何なる意味を持つのだろうか。

母に天皇の写真を見せる場面は「斜陽日記」でも一九四五年十二月六日の出来事として語られているのだが、そこに母と娘の会話は織り込まれていない。かず子のみが提示している写真についての母娘の会話を次に引用する。

「おおけになつた。」

「いいえ、これは写真がわるいのよ。こないだのお写真なんか、とてもお若くて、はしやいでいらしたわ。かへつてこんな時代を、お喜びになつていらつしやるんでせう。」

「なぜ？」

「だつて、陛下もこんど解放されたんですもの。」

この会話に示されているのは、新憲法が成立したことで表面化した母娘の決定的な相違である。まず、旧憲法下で高貴な立場を享受していた「最後の貴婦人」としての母は、主権を喪失した天皇に老いを見いだし、その姿に自身の身体を重ね合わせるかのように写真を見た同日に亡くなる。一方で、旧来の「女大学」に反抗して主体的に自らの意志を貫く姿勢を明言しているかず子は、主権が天皇から国民へ委譲されたことを「解放」ととらえる。「陛下も」と発せられていることから、天皇のみではなく家父長制の下で抑圧されてきた女性も「解放された」と解釈することもできよう。

ところで、母が死ぬ数日前に母娘は再び蛇を目撃している。振り返れば、第一章でかず子は母殺しの予感を語っていた。かず子が主体的に生きることを許容する新憲法の成立が、間接的に母の死の要因になったのだとしたら、図らずもかず子の死の予感的中したことになる。また一方で、第一章において、「蛇」はかず子の既存の生活に反抗する強い自我を表象してもいた。再び蛇を目撃したかず子は母殺しを果たし、自らの意思を確認して「道徳革命」へと向かっていく。



## 六、「道德革命」の継続

本論では、「斜陽」と「斜陽日記」の双方で語られている物語内容が位置づけられた時代状況の相違を比較しながら、「斜陽」の語り手かず子が「道德革命」の主張を形成していく道程をたどった。

「斜陽日記」の語り手静子は、一九四四年十一月に生じた蛇の卵を焼いた事件を母の死を予感させた出来事として回想していた。対して、初めて女性参政権が行使された一九四六年四月に蛇事件を語るかず子は強い自我を自覚し、「恋、」と語り始めようとする。

自我に目覚めたかず子が上原の「愛人」になりたいと自己の主張を言語化するのには、一九四六年夏に投函された上原宛書簡においてである。この主張は一九四六年四月から夏までの間に、要請された女性の生き方とは異なる第三の道を模索し、六年前に受けた上原からのキスを「ひめぐ」と認識したかず子が生成したものである。したがって、妻子をもつ男性の「愛人」になりたいという主張は、女性が自我を貫く生き方として提示されている。家父長制支配下の戦中にあたる一九四四年五月に、過去の罪を悔い改めて「女大学」を再受容した静子とは異なり、支配制度が崩壊した戦後の地点に立つるかず子は「女大学」にそむく主張を語り得た。

それから、静子が一九四五年九月に受容した『経済学入門』を、かず子は一九四六年九月に受容する。戦後の地点に立つるかず子は、ローザの「破壊思想」を説く姿勢に自らの「恋」を貫く姿勢を重ね合わせ、戦前・戦中には弾圧されていた「恋」と「革命」を「本当の生きる道」を示すものとして結びつける。そして、母が亡くなる直前に、かず子は自身の生きる道として「革命家になる」ことを直治に宣言した。

ここまでたどってきたかず子の変化は、新憲法が成立した一九四六年十月に母との決定的な相違を生む。「最後の貴婦

人」としての母は天皇が主権を喪失したことに伴って亡くなり、かず子は家父長制から解放された新たな時代に「恋の成就」を果たすために生き残る。このように、「道德革命」は母の死後に唐突に展開されたものではなく、女性参政権が行使され新憲法が作成されるただ中の一九四六年四月から同年十月までの期間の中で、蛇事件を語ることで自我に目覚めたかず子が自身の「恋」を貫く生き方を模索する中で発展させた主張なのである。

その後、第六章で「恋の成就」を果たし「私生児」を身ごもったかず子は、一九四七年二月七日付上原宛書簡で、「古い道徳をわづかながら押しつけ得た」と自身の「道德革命」を評価している。だが、「私たちの身のまはりに於いては、古い道徳はやつぱりそのまま、みぢんも変らず、私たちの行く手をさへぎつてゐる」とも語っている。「法の下の平等」として男女平等を唱う新憲法が公布されたとはいえ、人々が脈々とすり込まれてきた「女大学」に象徴される「古い道徳」から即座に脱却することは難しい。「こんどは、生れる子と共に、第二回戦、第三回戦をたたかふつもり」とかず子が語るように、女性が主体的に生きるための「道德革命」は、戦後七十五年を迎える今日においても主張され続けなければならない。

#### 附記

「斜陽」の本文は、『太宰治全集』第十卷（筑摩書房、一九九九年一月）に拠った。「斜陽日記」の本文は、太田静子『斜陽日記』（朝日新聞出版、二〇二二年六月）に拠った。ただし、旧字体は新字体に改めた。なお、本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所二〇一九年度「大学院生研究助成（A）」DA1902の成果である。

#### 注

- (1) 『斜陽日記』 出版の経緯に関しては、山内祥史「解題」（『太宰治全集』第九卷 筑摩書房、一九九〇年十月）ならびに相馬正戦後に語られた「道德革命」

一「資料『斜陽日記』のオリジナリティー——創作『相模曾我日記』の活字化」(『国文学 解釈と教材の研究』一九九九年六月)を参照されたい。

- (2) 饗庭孝男『太宰治論』講談社、一九七六年十二月
- (3) 梶木剛他『共同討議』『斜陽』をめぐって』(『国文学 解釈と教材の研究』一九七九年七月)
- (4) 野原一夫『斜陽』と『斜陽日記』(『新潮』一九九八年七月)
- (5) 戦後民主主義へと向かう時代状況の中で、かず子の主体的な「革命」を意義づけようとした論としては、山崎正純の『斜陽』——敗戦後思想と「革命」のエスキス(『国文学 解釈と教材の研究』二〇〇二年十二月)と松本和也の「明滅する(自由)——太宰治『斜陽』を解説する」(『太宰治スタディーズ』二〇〇六年六月)が挙げられる。
- (6) 高田知波『斜陽』論——ふたつの『斜陽』・変貌する語り手(『国文学 解釈と教材の研究』一九九一年四月)
- (7) 金ヨンロン『小説と(歴史的)時間』(世織書房、二〇一八年二月)
- (8) 青木京子『斜陽』と(道徳)革命——『教育勅語』・『家族制度をめぐって』——(『太宰治スタディーズ』二〇〇六年六月)
- (9) 小森陽一『解説』(太田静子『斜陽日記』小学館文庫、一九九八年六月)
- (10) (6)に同じ
- (11) 榊原理智「語る行為の小説——『斜陽』の消滅する(語り手)——」(『日本文学』一九九七年三月)
- (12) 「表1」に示したように、火事事件も、ほぼ同一の物語言説を静子は空襲が頻発する一九四五年八月一日の出来事として回想し、かず子は未帰還の直治を案ずる戦中から連続する意識をもつ一九四六年四月の出来事として語っている。
- (13) 上條末夫「衆議院議員総選挙における女性候補者」(『駒沢大学法学部研究紀要』一九九〇年三月)を参照。
- (14) 永吉寿子『斜陽』における(破壊)と(犠牲)——太宰治の倫理性——(『太宰治スタディーズ』二〇〇六年六月)
- (15) 「表1」に示したように、第二章の一九四六年初夏の地点からかず子が戦中末期の出来事として回想しているヨイトマケ体験は、静子も一九四五年七月の出来事として回想している。このヨイトマケ体験は、唯一両者が同一の時間に起きた出来事として回想している。
- (16) 石川松太郎「女大学について」(荒木見悟・井上忠校注『日本思想大系』34 具原益軒・室鳩巢)岩波書店、一九七〇年十一

月)

(17) 貝原益軒「女大学」(荒木見悟・井上忠校注『日本思想大系34 貝原益軒・室鳩巢』岩波書店、一九七〇年十一月)

(18) (16) に同じ

(19) 「女大学」の教えは、明治初頭を中心に賛否両論それぞれの立場から時代状況を鑑みた変化が施され、種々の「女大学」が出版されることで脈々と受け継がれてきた。詳しくは、菅野則子「近世〜近代における『女大学』の読み替え」(竹村和子・義江明子編『ジェンダー史叢書第三巻 思想と文化』明石書店、二〇一〇年七月)を参照されたい。

(20) ただし、静子もかず子も感銘を受けているのは、「革命」の内実としての「経済学」ではなく、「革命」の本質としての「破壊思想」とそれを説くローザの姿勢であったことは留意しなければならない。

[表1] 「斜陽」と「斜陽日記」に共通する物語内容における時間の比較

物語内容	「斜陽日記」 物語内容の時間	「斜陽日記」 語る地点	「斜陽」 物語内容の時間	「斜陽」 語る地点
蛇事件	1944年11月	母の死後 しばらく経って から	1946年4月	1946年4月
山荘へ引っ越し	1943年12月		1945年12月	1946年4月
火事事件	1945年8月1日		1946年4月	1946年初夏
ヨイトマケ体験	1945年7月		戦中末期	1946年初夏
「女大学」	1944年5月2日		1946年夏	1946年夏
『経済学入門』	1945年9月		1946年9月	母の死後 (1946年のうち)
天皇	1945年8月と 同年12月6日		1946年10月	母の死後 (1946年のうち)
母の死	1945年12月6日		1946年10月	母の死後 (1946年のうち)